

1920年代の亡命ロシア知識人とチェコスロヴァキア社会学

— P. A. ソローキン『長い旅路』第3部をめぐる現地調査 —

吉野 浩司¹

Russian Émigré Intellectuals in 1920s and Czechoslovakian Sociology:
Field Work around P.A. Sorokin's A Long Journey Part 3

Koji YOSHINO

第1章 はじめに

20世紀は戦争と革命の世紀であったといわれる。だが、その時代を生きた、知識人の生活に焦点をあわせるとするならば、20世紀とは〈亡命の世紀〉であったとも言い換えることが可能かもしれない。亡命知識人ということでは、ナチスドイツの圧迫から逃れたユダヤ人のことが取りざたされることが多い。だがロシア革命による反ボルシェビズムの知識人の亡命も、現代史を語る上では、ユダヤ人ディアスポラの問題と劣らない重要性をもつ。

ロシアを離れた亡命者の中には、当然ながら、数多くの政治家・学者・思想家・宗教家が含まれていた。そうした「亡命知識人」の学問的、思想的活動を再評価し、亡命先の国々に与えた影響について調査することは、特に思想史や文学史、あるいは知識社会学（社会学史）といった分野において行われてきた²。

さらに議論をロシアに限定してみよう。2017年はロシア革命からちょうど100年という節目を迎える年であった。日本の新刊書店においても、めずらしくロシア革命ならびにロシアに関する書籍が、数多く書架を飾った。全5巻のシリーズ本として出された『ロシア革命とソ連の世紀』（岩波書店）などは、その代表的なものであろう³。

P. A. ソローキン (Pitirim Alexandrovitch Sorokin = ПИТИРИМ АЛЕКСАНДРОВИЧ СОРОКИН, 1889年-1968年) は自伝『長い旅路』第3部第10章「エミグレ

(Émigré)」において、チェコスロヴァキアでの亡命生活についてつづっている。エミグレとはもともとフランス革命後の亡命貴族を意味するフランス語であった。それと同じく、ロシア革命後に亡命を余儀なくされた知識人を、エミгранト (Эмигрант) と呼んでいる。1922年9月23日、ソローキンはソビエト政府より国外追放を命じられ、モスクワからベルリンを経由して、チェコスロヴァキアに住む。1922年10月からチェコに滞在する。そこで生活は、1923年10月にアメリカへ向かうマルタ・ワシントン号に乗船するまで続くことになる。ここで扱うのは、この時期である。プラハでの生活は、ソローキンをして「黄金のプラハ (Golden Prague)」といわしめた。神聖ローマ帝国時代に栄えた都市の美称であるとともに、ソローキン自身の学問形成にとっても有意義なものであったからである。

プラハでの生活はソローキン社会学にどのような影響を与えたのか。それに関する文献調査ならびに現地の研究者たちへのインタビュー記録を報告するのが、本稿の目的である。

第2章 亡命ロシア知識人の研究

今回の調査の下調べの段階で刺激を受けたのは、諫早勇一『ロシア人たちのベルリン—革命と大量亡命の時代』（2014年、東洋書店）である。著者はもともとナボコフ研究者で、ナボコフ (Владимир Владимирович Набоков, 1899-1977) が亡命生活を

¹ 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

² 邦訳書にかぎっても、古くはヒューズ (H. Stuart Hughes, 1916-1999) が編集した『亡命の現代史』（第1巻～第6巻、みすず書房）あるいは、ルイス・コーザー (Lewis Alfred Coser, 1913-2003) の『亡命知識人とアメリカ—その影響とその経験』（岩波書店）がある。日本においても、前川玲子『亡命知識人たちのアメリカ』（世界思想社）、人物研究としても秋元律郎『マンハイム—亡命知識人の思想』（ミネルヴァ書房）などがある。

³ 20世紀のロシア思想については、御子柴道夫編、2006、『ロシア革命と亡命思想家—1900-1946』成文社、桑野隆、2017、『20世紀ロシア思想史—宗教・革命・言語』岩波書店など。

送ったプラハやロンドンでの事績を取り上げた精密な研究も行っている。この著作では、ナボコフ、プロコフィエフ（Сергей Сергеевич Прокофьев, 1891-1953）、シャガール（Marc Chagall, 1887-1985）といった著名な文学者・芸術者が取り上げられ、亡命先での活動が掘り起こされている。

日本でもそれなりに研究されつつある哲学者ニコライ・オヌーフリエヴィチ・ロースキイ（Николай Онуфриевич Лосский, 1870-1965）およびウラジーミル・ロースキイ（Владимир Николаевич Лосский, 1903-1958）親子、哲学者ピョートル・ベルンガルドヴィチ・ストルーヴェ（Пётр Бернгардович Струве, 1870-1944）と文学者グレープ・ストルーヴェ（Глеб Петрович Струве, 1898-1985）親子に関しても、こと亡命体験を主題化するような研究については、やや手薄な感じがする。確かに、彼らについては、同人雑誌『道標』の論文や寄稿者のいくつかの仕事に関する翻訳や研究論文が散見されるのは事実である⁴。しかしこれらは、道標派の人々にとってロシアおよびロシア革命とはどのようなものであったのかを問うものであった。ベルリン、プラハ、その他で送った亡命知識人としての生活とその後の彼らの学問的営為の関連が、いまひとつ判然としないのである。

さらに議論を社会学に限定するとすると、亡命知識人の問題は、ほとんど手つかずのまま放置されているといっても過言ではない。N. ティマシェフ（Николай Сергеевич Тимашев, 1886-1970）、G.

ギュルヴィチ（Георгий Давидович Гурвич, 1894-1965）、P. A. ソローキンらは、疑いもなく21世紀を代表する世界的社会学者である。ティマシェフは法社会学の開拓者として、ギュルヴィチは深層社会学を提唱者として、ソローキンは総合社会学者として、きわめて独創的な研究業績を社会学の分野で成し遂げている。にもかかわらず、ロシアから亡命生活にいたるまでの彼らの軌跡は、ほとんど語られることがなかったのではないだろうか。異文化間の比較とその差異への気づきを1つの研究の出発点とする社会学にとって、亡命知識人という経験は、それこそ彼らの社会学に、きわめて深淵な影響を与えているはずである。彼らについて研究するさいに、亡命先での主要著作のみを対象とするようでは、十全な研究をなしたことにはならない。なぜ、彼らがあのような独創的な社会学的著述をなしえたのかについて、解明することができていないからである。

亡命知識人の社会学を研究する意義は、そうした問いに答えるところにあるだろう。亡命知識人は、祖国の社会学に強い影響を受けたことは間違いない。しかしそれと同程度、あるいはそれ以上に、亡命という体験そのものが、彼らの社会学の進歩に大きく寄与した、ということも事実である。それは優れた学者であったからということはもちろんだが、亡命という経験それ自体の中に、重要な要因が隠されているのではないだろうか。そうした疑問から本稿では、次のような仮説が提

図表1 ロシア・チェコ史略年表およびソローキン亡命関連事項

年代	ロシア・チェコ関連事項	ソローキン関連事項
1917年	ロシア革命	ケレンスキー臨時政府の秘書官に就任する
1918年	オーストリア＝ハンガリー帝国からチェコスロヴァキア独立	ボルシェビキ政府により投獄される
1922年	ソヴィエト連邦成立（～1991）	10月、プラハに到着 『革命の社会学』をロシア語で執筆 翌年、渡米
1939年	ナチスドイツによりチェコスロヴァキア解体	『社会文化的動学』刊行中 (1937-1941)
1945年	第二次世界大戦終結 チェコスロヴァキア独立	
1948年	共産党政権樹立	『ヒューマニティの再建』刊行
1968年	プラハの春から共産圏による圧力強化へ	ソローキン死去
1989年	ビロード革命による民主化	1990年代以降ロシア・欧米の社会学でのソローキン再評価
1993年	チェコスロヴァキア解体	

⁴ ニコライ・ベルジャーエフ他、1999、『深き淵より』（ロシア革命批判論文集）。セルゲイ・ブルガーコフ他、1999、『道標（ロシア革命批判論文集）』。

起されている。すなわち亡命知識人による社会学の業績には、亡命という経験が濃厚に反映されている。そしてそのことが、彼らの社会学をきわめて独創的なものにしてしている。これを端的に表現するなら、亡命知識人は社会学の創造的な発展に寄与する、ということになる。

〔要旨〕『長い旅路』第10章「エミグレ (Émigré)」⁵

ベルリンに到着してからの数日間は、たいへん自由で、快活な日々を送ることができた。当時、ベルリンには、知識人、芸術家、政治活動家などからなる、亡命ロシア人サークルが存在していた。むろん、何から何まで恵まれた環境に置かれていたというわけではない。しかし、たとえお金のことや、将来のことに不安に感じることがあったとしても、共産党ロシアでの「地獄」にくらべるなら、何ほどのものでもなかった。

ベルリン滞在の4日目に、ソローキンはチェコスロヴァキア大使を通じて、マサリク大統領からの招待状を受け取った。翌日の午後、マサリクとベネシュと会食する。マサリクは、かねてより亡命者に対して親切であった。その場でロシアの現状などについて話し合った。そしてマサリクは、こう切り出した。「カレル大学で教えるつもりはありますか」と。しかし、これに対するソローキンの返事は、「できれば数年間を、心の平静をとりもどすために使いたい」というものであった。そこでマサリクは、特別な奨学金を手配することを約束した。それは他の亡命ロシア人たちにも与えられているものであった。

ソローキンは妻エレナとともに、プラハ近郊のチェルノシツェ (Černošice) に居を構えた。ロシアですっかり疲弊してしまった気力や体力を、ここでようやく取り戻すことができた。チェルノシツェからプラハへは、毎日のように通った。妻は細胞学の研究を行った。ソローキンはプラハの図書館で読書を行ったほか、時折、講演や学会へ参加するなどした。

他方で政府の要人らとも、しばしば会食をした。その中には、例えばマサリクやベネシュをはじめ、クラマーシュ (Karel Kramář, 1860-1937) やクロファーチュ (Václav Klobuč, 1868-1942) などがあった。これら政府高官らの歓待により、プ

第3章 エミグレ (亡命知識人) としてのソローキン

ここで、ソローキンの自伝を見てみよう。1922年9月23日ソビエト政府より国外追放を命じられたソローキンは、いかなる足取りでプラハにたどりつくのであろうか。

ラハは亡命ロシア知識人の、一大拠点となったといえるだろう。高名な学者、作家、芸術家、政治家、軍人などがいた。チェコ政府の協力のもと、彼ら亡命知識人は、ロシア人大学をはじめ、研究所やさまざまな組織をつくった。だが、おおかたの予想では、近く共産党レジームは崩壊すると考えられていた。彼ら亡命知識人たちは、きたるべきロシア復興のための再建計画を練っていたのである。

だがソローキンは、そういう考え方は取らなかった。そのうちに共産党支配が終焉するだろうとの楽観論には、疑いを持っていた。それだけではない。ロシアの将来は、祖国を離れた亡命知識人ではなく、国内に留まったロシア人が決めるべきだとの考えかたを固持していた。そうしたことからソローキンは亡命中、政治活動を極力ひかえていた。そのかわりに彼は研究活動を集中的に行っていた。

革命期には手にすることのできなかった西洋の社会学的知識を、最新ののものにした。それからプラハでは、いくどかの講演を行ったり、『ロシアの現状 (Современное состояние России)』(プラハ、1922年刊) という表題の著作をプラハで出版したりした。ロシア人大学あるいはチェコやカルパト・ロシア人 (ルーシン人) 向けの講義、そして講義案作りに余念がなかった。また『社会教育と教育に関するエッセー (Очерки социальной педагогики и политики)』(ウージュホロド、1923年刊) を刊行した。

編者および執筆者としても、彼は積極的に動き回った。特に雑誌『農民ロシア (Вестник Крестьянской России)』を、アルグノフ (Андрей Александрович Аргунов, 1866-1939) やマスロフ (Сергей Семенович Маслов, 1887-1945)、ベーム (Альфред Людвигович Бем, 1886-1945) らとともに編集した。

⁵ Sorokin, P.A., 1963, *A Long Journey*, pp.198-205. 本自伝は英語による著作であるが、ここで要約するにあたって、人名・地名その他に関し、適宜、ロシア語およびチェコ語の原語標記を行っている。

これらの自伝的記述には、いくつもの論点があるが、ここでは3点にしばって論じることにした。第一に取り上げたいのは、ソローキンとロシア革命、とりわけレーニンとの関わりについてである。

1917年の二月革命後、ソローキンはケレンスキー臨時政府のなかで要職を務めるようになる。しかし十月革命でレーニン率いるボルシェビキ党によりソビエトが打ち立てられたことで、ソローキンを含む政府の要人は、退陣を余儀なくされる。ソローキンは政治とは関わりを断ち、学術研究に専念することを告白する手紙を新聞『プラウダ (Правда)』に掲載する(1918年11月20日)。ソローキンの告白は次のような内容であった。「過ぎ去った革命の一年は、私に1つの真理を教えた。政治家は誤りを犯すことがある。政治は社会的に有益なこともあるが、社会的に有害なこともありうる。だが科学や国民教育の分野での活動は、つねに有益であり、つねに人民にとって必要である」。ソローキンはここで、政治家としての自己批判と、学問への回帰とを述べている。このソローキンの手紙を受けてのレーニンの演説が、全集にも所収されている。

周知のように、ピティリム・ソローキンは、カデットと提携していたエスエル右派の『人民の意志』の主要な寄稿者であった。掲載された手紙の中でのこの告白は、これまでソビエト権力に対して激しい敵意をいだいていた人々の中に起こった大きな転換、変化を意味している。ピティリム・ソローキンは一部の活動家の政策は多くの場合、社会的に有害であると言明しているが、このことは彼が公然と、真剣に、エスエル右派の全政策が社会的に有害であったことを、ついに承認したことを証明している。(「ヴェ・イ・レーニンの祝賀会での演説」『レーニン全集第28巻』大月書店、189-190頁)

またこれは、ボルシェビキ政府によるソローキンの投獄を、レーニンが特赦するという意味ももっていた。レーニンは別の機会にも、同じソローキンの手紙を取り上げている。

ピティリム・ソローキンは、非常に広範な社会的および政治的な潮流、すなわちメンシェビキ=エスエルの潮流の代表者である。

これが1つの潮流であるということ、メンシェビキとエスエルの相違は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの闘争に対する彼らの態度という観点からすれば重要ではないということ、このことを、1917年2月以来のロシア革命の諸事件は、特に説得的に、はっきりと証明した。メンシェビキとエスエルは、ともに小ブルジョア民主主義の変種である。これこそ、この潮流の経済的本質であり、基本的な政治的特徴である。この潮流が、その青年期に、非常にしばしば「社会主義的」色彩をおびることは、先進諸国の歴史から周知のことである。(「ピチリム・ソローキンの貴重な告白」『レーニン全集第28巻』大月書店、197頁)

レーニンがソローキンを評価するというのは、要するに、一人の有力な知識人が、小ブルジョア民主主義の変種であるエスエルとメンシェビキから手を引いたからである。エスエルとメンシェビキは、解体を余儀なくされ、ボルシェビキの側につくか、ブルジョア側につくのかの二者択一を迫られているということを説明せんがために引き合いに出されたのである。

第二に取り上げたいのは、ボルシェビキによる二月革命後の亡命知識人について、とりわけ「哲学者の蒸気船」についてである。

一九二二年レーニンは多数の人文系学者をソビエト・ロシアから追放することを承認した。大勢の傑出した哲学者の団がペトログラードやモスクワから、汽船(「哲学船」)で送り出された。ペトログラードからは経済学者や歴史家が西側諸国へ向かった。法律家、文学者、協同組合活動家、農学者、医者、財政学者も追放された。これはきわめて大規模な措置であり、モスクワやペトログラードだけでなく、キエフ、カザン、カルーガ、ノヴゴロド、オデッサ、トヴェーリ、ハリコフ、ヤルタ、サラトフ、ゴメリにまで及んだ。(ロイ・メドヴェージェフ『1917年のロシア革命』現代思潮社、1998年)

ソローキンの場合、亡命は海路ではなく陸路によって行われた。

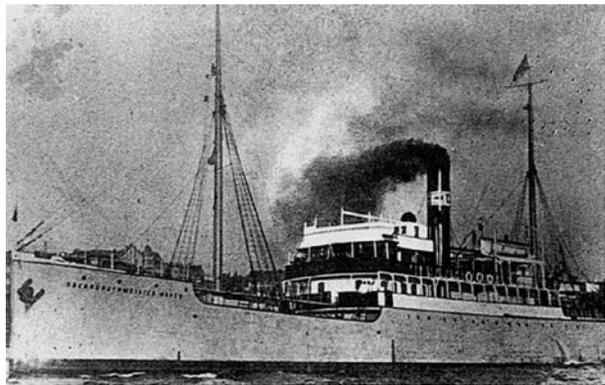
図表2 「ペトログラードの反ソビエト知識人リスト」(左) と「哲学者の汽船」(右)

СПИСОК
Антикоммунистический список профессоров г. Петрограда.

1. ЮРЬЕВ ПИТИРИМ АЛЕКСАНДРОВИЧ, проф. философии
2. КИЗЬМИН А.С. др. философия не только для интеллигенции
3. ЗИМОВИЧ Е.И. др. философия "
4. ПИКОЧЕ др. философия "
5. ХАТМАН А.С. др. философия "
6. ЛУТХИ др. философия "
7. ПИКОЧЕ др. философия "
8. ФРОМТ др. философия, не только для интеллигенции
9. ЗАХАРОВ Е.И. др. философия, не только для интеллигенции
10. ПЕТРОВ А.С. др. философия "
11. КУЛАНОВ С.И. др. философия "
12. ВОЛКОВИЧ И.И. др. философия "
13. ХАТМАН БОРИС др. философия "
14. ЧАДАЕВ не работает
15. НАСОВИЧ др. философия "
16. КОСОВИЧ др. философия "
17. БУЖИКИ А.А. др. философия "
18. ЧЕРНЫШОВ Д.И. др. философия "
19. ЗАХАРОВ Е.И. др. философия "
20. САЛЮЖИКИН И.И. др. философия "
21. ФРОМТ Е.И. др. философия "
22. НАСОВИЧ В.И. др. философия "
23. НАСОВИЧ В.И. др. философия "
24. КОСОВИЧ В.И. др. философия "

Список членов 64-го отделения Союза профессоров г. Петрограда.

25. ПОСЕТНИК не работает
26. КОСОВИЧ БОРИС ИВАНОВИЧ, др. философия "
27. ЧЕРНЫШОВ Д.И. др. философия "
28. ПОСЕТНИК СЕРГЕЙ ИВАНОВИЧ, др. философия "
29. КОСОВИЧ В.И. др. философия "
30. КОСОВИЧ В.И. др. философия "



※左の知識人リストには一行目にソローキンの名が現れている。

(出典<http://rabkor.ru/columns/day-in-history/2015/09/29/philosophers-ship/>)

こうした当時の事情、わけでもソローキンの亡命に関する事跡については、ロシアのジャーナリストであるドイコフ(Юрий Всеволодович Дойков, 1955-)が、プラハその他の図書館などで一次資料を収集している⁶。すこぶる興味深い資料もふくまれていることから、ここで簡単に紹介しておきたい。

まず1つめは、1922年9月27日の新聞『リガ便り(Рижский курьер)』(付け)である。そこにはソローキンの哲学汽船(列車)に関する記述がうかがえる。ホテル「パーク(Парк)」は、強制送還を逃れた人々をかくまった。ペシエホノフ(Алексей Васильевич Пешехонов, 1867-1933)元首相やソローキンなど、亡命者の中では最上級の人々である。その一方で、ナリム(Нарым)〔現カザフスタンの都市〕やシベリア(Сибирь)送りにさせられた人も多い。

また2つめの資料としては、ベルリンの新聞がある。それは、同1922年10月3日の日刊紙『舵(Руль)』に、ソローキンが「ロシアの現状(О современном состоянии России)」という題の講演を行ったとの記事である。ソローキンの講演では、革命の結果、ロシアでは病気が蔓延したこと、教育システムが崩壊したこと、あるいはモラルが低下したことなどが報告されたとしている。

大衆は多くの関心を寄せた。またソローキンはロシアの行く末を楽観視しているとも記している。

この共産党ロシア楽観論については、後年に書かれた上述の自伝とは、内容としてやや異なるところがある。上に要約した自伝にもあるように、ソローキンは当初より楽観していなかったと述べているからである。ここでは新聞の方が、ソローキンを含めた当時の知識人の共産党ロシアの見方を伝えているものと理解しておきたい。

もうひとつ、第三に挙げておきたいのは、マサリク率いるチェコスロヴァキアにおけるロシア人亡命者の保護政策についてである。その政策とは「ロシアアクト」と呼ばれるもので、最近、脚光を浴びつつある「在外ロシア」というテーマで取り上げられている。

1920年代から30年代にかけて大規模に行われた「ロシア人支援活動(チェコ語で Ruská pomocná akce=Русская акция)」とは、チェコスロヴァキア政府がロシア人亡命者に対して行った、生活、教育、就職などへの支援政策である。特に知識人や大学生は喜んでチェコスロヴァキアに迎え入れられた。彼らはロシア国語による教育を受けることができた。この支援活動に関しソローキンは、やがてロシアに帰国するであろう学生に対し、次のような忠告を発している。

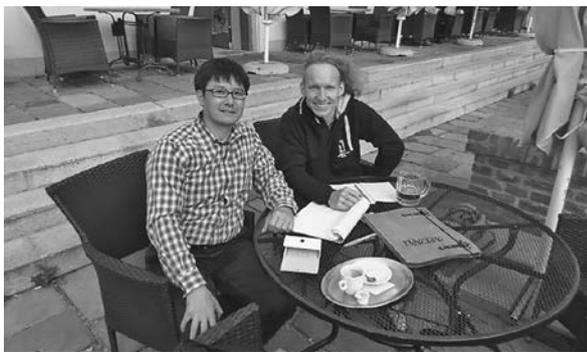
⁶ Дойков, Юрий, 2009, *Питирим Сорокин в Праге 1922–1923*. Архангельск.

マサリクのいわゆる「ロシア人支援活動」はいつ終わるか分からない。したがって若者は、長期的視野に立った仕事に就くことを考えなければならない。古い知識人として振る舞うのではなく、自助の精神を持ち、実用的な知識を身につけ、体を使った作業をいとわないことをソローキンは主張した。プラハの学校を終えても、ロシアで教師や弁護士になる見込みは薄い。手に職をつけるよう努めなければならない⁷。

以上のように、ロシアに戻って労働者として働くことのできる知識と技能を習得するように、というのがここでのソローキンの忠告内容であった⁸。

第4章 若手研究者へのインタビュー

チェコでの現地調査は2017年9月12日(火)～9月23日(土) 11泊12日の日程で行われた。訪問したのは、プラハとブルノである。調査目的は、下記のとおりである。第一に、ソローキンが亡命時代の一時期を送ったプラハに関する資料収集および関連施設を訪問すること。第二に、プラハその他の都市における、チェコ社会学史および思想史の分野で活躍する、若手学者を訪ね、チェコの学問におけるソローキンの位置づけについて議論すること。第三に、1920年代のプラハおよびチェコスロヴァキアの社会学史に関する文献収集を行うこと。この三点であった。ブルノでは、シレジア・ヴ・オパヴァ大学のドウシャン・ヤナーック教授、プラハでは、カレル大学教授ズデニェク・ネシュポル、チェコ科学アカデミー研究員マレク・スコヴァジュサと面談することができた。



図表3 ヤナーック氏(左)と筆者(右)

第1節 ドウシャン・ヤナーック (Dušan Janák, 1979-)

9月14日、15日の2日間、ブルノ市内でシレジア・ヴ・オパヴァ大学のドウシャン・ヤナーック氏にインタビューを行った。ヤナーック氏によると、ブルノは「モラビアのマンチェスター」と呼ばれる土地柄である。18世紀後半、この地の周辺で炭坑が見つかったことは、その後の工業化に有利に働くこととなる。さらに19世紀に入ると、繊維産業が本格的に発展していくこととなったのだという。

ヤナーックの指導教官は、ハーバーマス(Jürgen Habermas, 1929-)のもとで学んだヤロスラフ・ストジテツキー(Jaroslav Střítecký, 1941-)という哲学者、社会学者であった。ストジテツキーは、ハーバーマスの仕事をチェコに紹介するという役目を果たした学者だという。ただし必ずしも多作の人ではなかったのだという。ヤナーック氏は、想像と違ふかなり屈強な体つきであった。聞く前はアルピニストでもあったという。

ブルノのマサリク大学で博士号を取得した。マサリク大学といえば、チェコ社会学では著名なブラハ(Inocenc Arnošt Bláha, 1879-1960)がいたところである。彼が伝統を作ったブルノ学派は、プラハ学派とならんで、チェコ社会学の二大流派を形成している。まず、マサリクとブラハの社会学について聞いてみた。

マサリク(Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937)について

チェコ社会学の代表は、マサリクとブラハである。マサリクはソローキンをチェコに招いた哲学者・政治家であった。ブラハはチェコ社会学を建設した学者とっていいだろう。マサリクもブラハも、出はそれほど高くはなかった。当時のチェコの支配階層は、ドイツ生まれの貴族が大半であったことは対照的である。印象的だったのは、マサリクは「フス派(Hussites)」であるというヤナーック氏の指摘である。宗教改革のヤン・フス(Jan Hus, 1369-1415)を信奉する一派で、

⁷ ソローキンが雑誌『大学時代』(1923年9月)に掲載した「亡命ロシア人の準備について」という記事による。Сорокин, П. А., 1923, “К вопросу о подготовке эмигрантской русской молодежи” *Студенческие годы* (сентябрь 1923 г.).

⁸ ロシア人支援活動に関するロシア語文献としては、Лукаш Бабка и Игорь Золотарев Сост., 2012, *Русская акция помощи в Чехословакии история, значение, наследие*, Прага: Национальная библиотека Чешской республики, チェコ語文献としては、Anastasia Korřivová, *Středisko ruského emigrantského života v Praze* (Praha: Národní knihovna ČR), 2001などがある。

19世紀末の民族運動家の多くがそうであったようにマサリクもフス派に改宗したのだという。

チェコの哲学は倫理学志向が強い。マサリクは、1870年代の段階で、当時、頻発していた自殺の原因を、宗教の世俗化に求めている。そのことは彼の全2巻のマルクス主義体系の著作『社会問題 (Otázka sociální)』を書くが、ここでは唯物論を批判し、精神性に重きを置こうとしている。この点は、ソローキンの「感覚的文化心性 (Sensate cultural mentality)」への批判に似ているように感じられる。さらにマサリクの代表作としては、全3巻の『ロシアとヨーロッパ (Rusko a Evropa)』⁹がある。

ブラハとチェコ社会学

そのマサリクの弟子が、ブラハであった¹⁰。ブラハの社会学には5つの特徴がある、とヤナーックはいう。第1に、フランスでデュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) から学ぶが、数量的アプローチ辺倒ではなく、意味的方法 (解釈学) をも援用したこと。第2に、批判的リアリズムであったこと、言い換えると折衷主義的 (Eclectic) であったこと。第3に、モラルと愛とスピリチュアリティを重視したこと。第4に、政治と社会学の親近性があること。これは彼の社会学をきわめて実践的なものとしている。第5に、都市と農村の社会学研究を行ったこと。

要するにブラハの研究の三本柱は、労働者、農民、そして知識人であった。以上のように総括した後、彼はブラハのマテリアルアプローチは、現代の社会学でいうとブルデュー (Pierre Bourdieu, 1930-2002) のハビトゥス概念に似たアプローチであるとのことである。ちなみにヤナーックの祖父母はブラハの講義を受けたことがあるという。彼女によると、教室はいつも満杯で、講義が終わると拍手がまぎ起こったということであった。

概してチェコの社会学は現実主義 (リアリズム) である。しかし、ここでいう現実主義には注意が必要であるとヤナーック氏により注意をうながされた。それというのも現実主義というのは、「ありのままの現実」を見るという文字通りの意味が1つ、さらにもう1つはプラグマティック・リアリズムの意味であるという。これは「現状」

に応用させる社会学であるという意味で用いられるということである。要するに、チェコ社会学が現実主義であるという場合は、後者の応用社会学という意味においてとらえなければならないという指摘であった。確かに、都市労働者や農民のかかえる問題に、どのように対処していくのかを考えるのが、チェコ社会学の現実主義の意味としてはふさわしいようである。

上記のように、ヤナーックはチェコ社会学の歴史に造詣が深く、こちらもあらかじめ下調べをしていたにもかかわらず、必死でメモをとるはめになった。しかしチェコ社会学史もさることながら、東欧圏の社会学史に精通し、交流をもっていることは驚きであった。彼は東欧圏の社会学を次のように概説してくれた。

東欧社会学

まずレーデラー (Emil Lederer, 1882-1939) が中欧社会学者の一つの典型である。日本でも著名なオーストリア出身の経済学者である。どうして典型であるのかと質問すると、彼は亡命者であり、ユダヤ教徒であり、社会問題 (労働問題) へ主力を傾注したからだと答えてくれた。

ポーランド社会学の特質としては、質的アプローチ、意味学派、文化社会学、農村社会学がある。ハンガリー社会学の特徴としては、文学・芸術・科学的な志向が強い。また日曜サークル (マンハイム、ルカーチ、ポランニー) など、政治に関与する社会学者が多い。

チェコとルーマニアの社会学は、東欧圏の社会学の中では比較的先進的であった。ただし、ルーマニア社会学の場合は、ディミトリエ・グスティ (Dimitrie Gusti, 1880-1955) の「一人舞台」だったとのことである。グスティは、政府資金を潤沢に利用できた。国際社会学会議 (international sociological congress) を開催しようとした。

以上のような東欧圏の社会学の説明を聞いて、改めて世界の社会学の裾野の広がりを感じさせられる結果となった。西洋圏の社会学の情報は入るけど、それにくらべ東欧 (中欧を含む) の社会学の情報が、ほとんど伝わってこないことからくるものだと考えられるだろう。

⁹ マサリク『ロシアとヨーロッパ—ロシアにおける精神潮流の研究』(全3巻、石川達夫訳、成文社)。

¹⁰ ブラハについては、邦文圏での紹介はほとんどなされていない。ディルク・ケスラー、2003、『社会学的冒険』(恒星社厚生閣) に、一部紹介がなされている。

ポーランドのジグムント・バウマン (Zygmunt Bauman, 1925-2017) やオーストリア出身のピーター・バーガー (Peter Ludwig Berger, 1929-2017) といった、スロベニア出身のトーマス・ルックマン (Thomas Luckmann, 1927-2016) など、個々の社会学者については、あるていど知られているが、その出自の精神風土を考慮した社会学的精神の系譜をたどるような研究はない。これらを含めた東欧圏社会学の一系譜を位置づけなおしてみることは、世界の社会学を、よりいっそうグローバルなものとするための不可欠の課題といっていだろう。

ソローキンとチェコ社会学

最後に、ソローキンとチェコ社会学との関係についても教示を受けた。拙著『意識と存在の社会学』に関して質問を受け、ソローキンの根本的な考え方を説明した。それはパーソナリティと社会と文化の統合性、さらに心性 (mentality) の変化が文化の変化を基礎づける、というソローキンの根本的な考え方 (内在的変動の原理) についてであった。このソローキンについての説明からヤナーック氏はただちにズナニエツキ (Florian Znaniecki, 1882-1958) の最初期の哲学的方法論を連想し、彼にも似たような発想があることを教えてくれた。おそらく1910年に書かれた『哲学における価値の問題 (Zagadnienie wartości w filozofii)』を指しているのであろう。ズナニエツキの師匠は、ルドヴィコ・クシヴィツキ (Ludwik Krzywicki, 1859-1941) であった。

また今回の調査で明らかにしたかったことがある。それはソローキンがなぜ農村社会学へと足を踏み入れるようになったのか。きっかけは、ソローキンのプラハ体験が大きかったのではないかということであった。ヤナーック氏により、次のような回答を得た。確かに1920年代にチェコスロヴァキア科学アカデミーは農業研究に集中したことは事実である。プラハも農村問題に関する調査研究を行っている。チェコでの体験がソローキン

に何らかの影響関係があったことは間違いなさだろう。

チェコの亡命ロシア知識人の研究を、さらに深めていく必要があると感じた¹¹。ヤナーック氏自身の研究によると、チェコの社会学関連の雑誌において、ロシア人の人名が1989年以降ほとんど出なくなったという¹²。ロシアにおける革命以前の学問の再評価の状況とは対照的である。チェコにしてみると、当初の目的はどうか、結果として亡命ロシア人が、やがてくる共産主義体制の地ならしの役目を果たしてしまったという嫌悪感からくるものであろうか。1989年とは、もちろん東欧共産主義圏の崩壊をのはじまりの年を意味する。

ロシアでは革命以前の社会学者の研究がさかんである。それとともに在外ロシア人の研究としてチェコにおける亡命知識人の研究、とりわけソローキンを含む社会学者たちの研究を深めていかなければならない、との決意を新たにした。

ブルノの街並み

最後に、ヤナーック氏より、ブルノの街を案内してもらった。教会はいたるところにあるのだが、そこはかたなく無神論者が多そうな印象を受けた。古い建築物もあれば、それらの装飾を無残に削ぎ落とした共産主義時代の遺構も目立つ。また近代的な建築、ガラス張りの現代建築などが交錯しつつ建っている。コンクリートの打ち付けで、装飾が一切排除されているものもある。さらには中心地を少し離れると、建物の一室にチベット仏教の寺と思しき部屋を設けたビルなども見つけられた。

¹¹ 今回会うことはできなかったが、この亡命知識人に関しては、ヤロミール・マハ (Jaromír Mach) 氏が研究を重ねている。http://www.slaviste.cz/index.php?page=detail&id=480-mach-jaromir-

¹² ヤナーック氏によって教えてもらったことだが、それを簡単に調べることができる、いい資料があるという。それはチェコの主要雑誌の雑誌記事のCD-Romである。Nešpor, Zdeněk R., Anna Kopecká (eds.) Edice českých sociologických časopisů | Sociologický ústav AV ČR, v.v.i. 試みにソローキンが滞在した1920年ごろのいくつかの文献、ソローキンの著作のチェコ語訳など検索すると、ただちに十数件の文献を閲覧することができた。これを編集したのが、後に会う予定になっている、ズデニェク・ネシュポル氏であった。

図表4 緑の広場（左）とブルチャーク（右）



たまたま季節柄、発酵性のワインであるブルチャーク (burčák) を飲むことができた。街中に出店がならぶのは、秋の風物詩だという。アルコール度数は低く、果汁たっぷりの、まるでジュースのような味わいだった。チェコワインの産地は南モラビアで、良質のぶどうがとれる田舎街であるという。ブルチャークを売っている店に、ヤナーック氏が案内してくれた。入り口に無造作に十字架がかかげられてあった。チェコにおけるワインとキリスト教とのつながりは深いのだという。

その店で、ヤナーック氏に、最近の仕事と今後の仕事について聞いてみた。最近、マイノリティの研究を行ったという。特に映像資料を駆使した研究書を出版したということである。それはチェコの著名な写真家インドジフ・シュトライト (Jindřich Štreit 1946-) の写真を利用して出されたもので、チェコに住むロマの暮らしを論じた著作である。

今後の課題として、非言語的コミュニケーションの研究をしたいとのこと。母子関係、人と動物との意思疎通、合気道をはじめとする武道家のコミュニケーション。これらに共通する意識の深層構造を解明することが、今後の課題であるという。東欧圏社会学とソローキン社会学の関連を考えていく中で、スピリチュアリティの探求を重視する点で両者の類縁性があるように感じられたところである。その意味でヤナーック氏のこのテーマも、東欧社会学のスピリチュアル探求の系譜に連なるような、たいへん興味深い課題である。

第2節 プラハのチェコ科学アカデミーの2人の若手研究者

9月18日、19日には、プラハのチェコ科学アカ

デミー社会学研究所 (Sociologický ústav Akademie věd České republiky) でインタビューを行う予定になっていた。当然のことながら首都プラハはブルノとは違い、観光客の量も桁違いに多い。城や教会の数もおびただしく存在し、熱心に観光して歩いている人々がいた。プラハで会う約束をしていたのは、ズデニェク・R・ネシュポル (Zdeněk R. Nešpor, 1976-) 氏と、マレク・スコヴァジュサ (Marek Skovajsa, 1974-) 氏である。ズデニェク氏は歴史志向の強い社会学史研究者で、優秀な若手研究者である。またスコヴァジュサ氏は英文による近著『チェコ共和国の社会学』をもつ堅実な学者であるとのことであった。

亡命ロシア人について

ネシュポル氏は、2017年よりカレル大学文化社会人類学部教授を務めている。若くして教授職に就いた俊才である。こちらが一方的に質問をすることとなった。

まずは、また亡命ロシア知識人についてである。プラハの西方60キロのところにあるポジェブラディ (Poděbrady) に、かつてロシア人大学があったこと、そこでは法学部ならびに教育学部が存在したことを聞く。またプラハの東方120キロのところにあるカルロヴィ・ヴァリ (Karlsbad) にも、ロシア人コミュニティが存在していたことを教えてもらう。

ソローキンはプラハの近郊チェルノシツェ (Černošice) に住んだのだが、おそらく生活費が安いこと、中心部よりも静かな環境を彼が好んだからだろうということであった。おそらく今でも家は残っているはずだということであった。ただ、今では調べる手立てがないとのことで、チェコの学者でも、所在地を特定することが困難であ

ることが分かった。

また言語学者で、ソローキンと同様ロシアからプラハに移り住んだヤコブソン(Roman Osipovich Jakobson, 1896-1982)は、世界的に有名である。同時代にアメリカで教鞭をとるなど類似しているところも多い。しかしソローキンとの関係が語られないことは、たいへん不思議なことであるとネシュポル氏は語ってくれた。ヤコブソンがブルノで暮らしていたことも理由の1つとして挙げられるのかもしれない。なおヤコブソンの妻はチェコ人であった。

ヤコブソンと同様に、広範囲な仕事をした亡命ロシア知識人サヴィツキー(Пётр Николаевич Савицкий, 1895-1968)とソローキンとの関連についても語られていいところである。彼もまたロシア人支援活動の恩恵を受けたロシア人の一人である。ラーゲリーへ送られるも、ラッセルによって救われるなど、数奇な運命をたどっている。

チェコの学問の実践的性格

思想家ではなく社会学者としてのマサリクとは、どのような人物であったのかをネシュポル氏に聞いてみた。答えは下記の通りであった。マサリクは社会改良主義から社会学の研究に移った。いまだ導入段階にあったチェコのマルクス研究状況にあつて、いち早くマルクスを体系的に批判

する大著を書いたことは、高く評価されている。社会学としては、コントの思想からの影響が強いとのことである。マルクスを摂取しつつ社会改良主義の立場にたっていたということである。先日のヤナーック氏へのインタビューにおいても、チェコ社会学の1つの特徴が、実用性・実践性にあるという指摘がなされた。そうしたことを考え合わせると、初代チェコスロヴァキア共和国大統領マサリクが、哲学者、社会学者であったことに、それほど違和感を覚えなくなった。それにちなんで連想したのは、チェコの民主化を象徴するピロード革命を達成した「憲章77」という反社会主義体制運動のことである。その発起人の一人にヤン・パトチカ(1907-1977)という哲学者が関わっていることも、そうしたチェコの学問のありかたを象徴しているように思われる。

新刊『チェコ共和国の社会学』(2017年)について

翌9月19日に会う予定になっていたのは、マレク・スコヴァジュサ氏とヤン・バロン(Jan Balon, 1973-)氏である。チェコへの調査旅行の出発の直前に、英語によるチェコ社会学史の著作を発見し、著者にメールを送って、忙しい中、突然の訪問を快諾してくれた。

『チェコ共和国の社会学——東側と西側のあいだ』目次。

- | | |
|-----|--|
| 序 論 | チェコ共和国の制度史 |
| 第1章 | 国家建設に仕える社会学——トーマス・マサリクの遺産 |
| 第2章 | 間違いのはじまり?——1918年から1950年までのチェコ社会学の成長と破壊 |
| 第3章 | 1950年から1969年まで——社会主義の王子の顧問となる |
| 第4章 | 1969年から1989年まで——党主導者の長い時間 |
| 第5章 | 1990年代——再建と西側への回帰 |
| 第6章 | 2000年以降——ヨーロッパへの編入 |

スコヴァジュサ氏は、チェコの代表的な社会学の雑誌である、『社会学評論』の編集をしており、チェコ科学アカデミー社会学研究所内にあるその編集室でのインタビューに対応してもらった。とりわけ戦間期に関する記述については、スコヴァジュサ氏が執筆しているとのことであった。現在はチェコ科学アカデミー社会学研究所所員で、元カレル大学人文学部研究部長を務めてい

たとのことである。ヤン・バロン(Jan Balon)氏は、アメリカ社会学史にも詳しく¹³、ぜひ意見を交換したかったが、あいにく急用が入ったということで、会うことができなかったのは残念であった。

スコヴァジュサ氏によると、チェコ人がソローキンをはじめとする亡命ロシア人に期待したことは、革命や当時のロシアの情勢についての考え方

¹³ Jan Balon, 2012, *Elektronická kniha: Sociologie v USA. Historické kontextualizace*

であったのではないか、ということであった。中でもソローキンは、若い世代に強い影響を与えたということである。

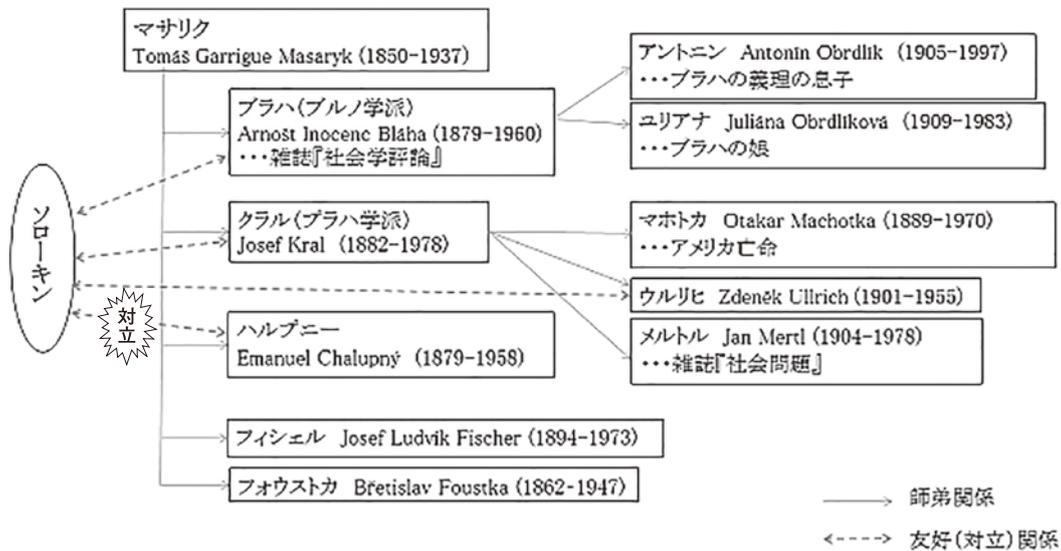
現代チェコを代表する社会学者ミロスラヴァ・ペトルシェク (Miloslav Petrussek, 1936-2012) が、かつてソローキンにとってのプラハの重要性を述べたことがあるとスコヴァジュサ氏は述べた。またペトルシェクの教え子がソローキン論を書いたことがあるとの情報もある。残念ながら誰が書いて、現在、どこに所属しているかは不明であるとのことであった。いずれも、たいへん興味深い指摘であったが、まだその事実を特定できていない。これらについては他日を期したい。スコ

ヴァジュサ氏は、2014年に横浜で開かれた世界社会学学会のため来日したことがあったそうである。

第5章 ソローキンと交流のあったチェコ社会学者

上記のインタビューにより、チェコ社会学史のおおまかな見取り図を描くことが可能となった。特にヤナーツク氏は、ソローキンとチェコ社会学者の関係図を描いてくれた。これがたいへん秀逸で、ソローキンとの友好・対立の関係のみならず、チェコ社会学史を一覧できるようになっている。

図表5 チェコ社会学の系譜 (ソローキンとの関係)



上記の人物を含めた、ソローキンの影響関係、交友関係、あるいは敵対関係については、あらかまし下記のような人物であった。マサリクとブラハについては、すでに述べたので、ここではそれ以外の学者について確認しておきたい。

◆ヨセフ・クラル (Josef Král, 1882-1978)
 ブラハがブルノ学派を形成したのに対し、クラルはプラハ学派を形成した。ブラチスラバ大学教授、カレル大学哲学部で社会学を講じる (1934年-1950年)。カレル大学哲学部の学部長を1946年から1947年まで務めた。彼は1924年から1967年まで、長きにわたりソローキンと良好な交流もつた。

◆エマニュエル・ハルプニー (Emanuel Chalupný, 1879-1958)

ブラハ、クラルとならぶ第三世代を代表するハルプニー、彼はソローキンの『革命の社会学』を *Parliament* 誌に部分訳で掲載するなど、ソローキンからも一定程度の影響を受けている。ただしソローキンとの関係は愛憎相半ばする両義的なものではなかったか、というのがスコヴァジュサ氏その他の見解であった。ヤナーツク氏は対立関係にあったと解釈している。

◆ズデニェク・ウルリヒ (Zdeněk Ullrich, 1901-1955)
 プラハ学派のクラルの弟子にあたるチェコ社会学の第三世代の代表の一人がウルリヒ。彼は1937年までカレル大学で教鞭をとる。その後、共産党政権が成立する1948年に、エジプトのアレクサンドリア大学に移った。ウルリヒは、革命や戦争などに関心を持っていた社会学者であった¹⁴。彼の

妻 (Blažena Ullrichová, 1901-1979) は、ソローキンの『現代社会学理論』のチェコ語訳 *Sociologické nauky přítomnosti* (Jan Laichter, 1936) を出版した。ソローキンとも関係の深い社会学者の一人であった。

◆フランチシェク・オンドジェイ

(František D. Ondřej, 1914-?)

本名は、ジェデク・フランチシェク (Dědek František)。ソローキン著『現代の危機』のチェコ語訳 *Krise našeho věku* (Brno, 1948) で有名。

◆ヴァクラフ・スメタンカ

(Václav Smetánka, 1886-?)

哲学者でソローキン著『革命の社会学』のチェコ語訳を1923/24年から1927年にかけて雑誌『パラメント (Parlament)』に連載した。『革命の社会学』がアメリカで刊行されるのが1925年だから、それ以前の、おそらくはロシア語版の草稿からのチェコ語訳だと思われる。

◆ヴァニヤック・アントニン

(Vaněk Antonín, 1932-1996)

共産主義者で、著書『社会構造』(プラハ、1975年刊)がある。ソローキンとウェーバーを批判した¹⁵。イデオロギー的な批判であったが、チェコの共産主義時代の学問のありようを垣間見ることができる。

◆ヴラジミル・カドレツ

(Vladimir Kadlec, 1912-1998)

1946年から1949年まで、ソローキンと交流を結んだ。ソローキンが逝去した1968年、チェコスロヴァキア社会学会人類学セクションの場で、ソローキンの思い出を語った。

◆ボハミル・トレンカ

(Bohumil Trnka, 1895-1984)

哲学者で、1937年パリの国際社会学会でソローキンと会ったとき、『革命の社会学』を熟読したとソローキンに語ったとの記録がある。

以上、ソローキンとの関係を中心に、チェコ社会学史を瞥見してみたが、それだけでもチェコ社会学の厚みのある伝統を感じることができる。日本のみならず世界においても、チェコ社会学の紹介¹⁶は、ほとんどない。スコヴァジュサ氏らの著作をきっかけに、チェコ社会学が広く紹介され、その知見が社会学の共有財産になることを願ってやまない。

第6章 ソローキンのプラハ時代

以上のところで、チェコの社会学とソローキンとの関係は、ある程度つかむことができたろう。そこで次に、ソローキンがプラハで、いかなる亡命経験を送ったのか、それが彼の学問にどのような影響を与えたのか、その問題について考えてみたい。

実のところこの課題は、2016年秋のロシアでの調査¹⁷の延長線上にあるものである。ペテルブルク大学のロマノソヴァ氏は、ソローキンがプラハ時代に「都市と農村」という論文を書いたことを教えてくれた。それにより、アメリカで書かれた『農村・都市社会学原理』の先蹤をなすものが、プラハにあることが想像できた。プラハでの経験が、ソローキンを農村社会学へと導いたのではないかという仮説がそこで生まれたわけである。

そうした仮説のもと、ロマノソヴァ氏の論文「学問的アメリカ農村社会学のロシア的期限」¹⁸を読んでみた。すると、たいへん興味深い記述があったので、それについて紹介しておきたい。それはあらまし下記のような内容である。

¹⁴ Helena Janišová, 1998, *Zdeněk Ullrich. Příspěvek k dějinám československé sociologie 1945-1949*, Praha : SLON.

¹⁵ Antonín, Vaněk, 1975, *Socialní Struktura*, Praha.

¹⁶ 日本においては石川晃弘が、社会主義社会学という限定付きではあるが、東欧圏の社会学を紹介している。石川晃弘、1967、「チェコスロヴァキア社会学」『社会学評論』18巻第1号あるいは、石川晃弘、1969、『マルクス主義社会学—ソ連と東欧における社会学の展開』(紀伊国屋書店)など。上述のスコヴァジュサ氏が、石川晃弘の名前を知っていた。

¹⁷ 吉野浩司、2017、「寒村トウリヤからサンクト・ペテルブルク大学までの足跡を追って——P. A. ソローキン『長い旅路』第2部をめぐる現地調査」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第15巻第1号、5-22頁。

¹⁸ Ломоносова М.В., 2014, “Российские истоки развития сельской социологии в американской академической социологии,” *Научный журнал*. № 2 (5), С.157-168.

1917年、ソローキンは「全ロシア農民会議 (Всероссийской крестьянской конференции)」を召集する準備を始めた(写真、後列左より4人目)。そのかわり、エスエル右派の新聞『人民の意志 (Воля народа)』の編集に携わった。さらに1919年になると、「農業科学アカデミー (Сельскохозяйственной академии)」の社会学教授、「国立経済研究所 (Институте народного хозяйства)」教授に選出された。

図表6 ロシア農民会議 (ソローキンは後列左より4人目)



チェコに亡命すると、プラハの農業協同組合 (Институтом сельскохозяйственной кооперации) の設立にも、積極的に関与したということである。1922年にはソローキンは「農民ロシア」グループを結成し、後述する同名の雑誌を刊行した。そして何より、1924年に農業国際事務局より発表した論稿「農本主義イデオロギー」が、この時代のソローキンの農村社会学の方向性を考える上で、きわめて重要である、という指摘をロマノソヴァの論文により確認することができる。

この論文は、チェコに亡命中のロシア人がロシア語で出した雑誌であるという事実のため、これまで人目に触れることがほとんどなかった。流通数も僅少な上に、むろん再版もない。その結果、ソローキンの学問的業績を語る上で、本稿が触れられることがなかった。

ロマノソヴァの理解によると、ロシアの社会

教育の伝統は20世紀初頭にコヴァレフスキー、ドロベルチ、ペトラジツキイ、カレーエフなどによって打ち立てられてはいた。しかし1920年代から1928年までに、ロシア社会学は人文的知識から史的唯物論に塗り替えられてしまった。しかし、他面においてソローキンによる科学的・組織的な社会学の設立の動きも忘れてはならない。とりわけ農村社会学の先駆的な研究の方面でそれは展開されている、とロマノソヴァはいうのである。

つまり亡命直前から亡命期間中に、ソローキンは実証科学的社会学を完成させようとし、その流れの中で農村社会学に至りついたという事実は、記憶しておいてよいことだろう。

第1節 雑誌『農民ロシア』について

亡命ロシア人たちがロシア語で出した本雑誌『農民ロシア (Крестьянская Россия)』¹⁹は、1922年から1924年にかけてプラハで刊行されたものである。

ここで注目したいのは、その第4号に掲載された「都市と農村—生物社会的特性 (Город и деревня: Биосоциол. характеристика)」である。のちにこれは、後述する『農本主義イデオロギー』という小冊子として、加筆修正された形で出版される。

アメリカに渡ったのちに『農村・都市社会学原理』として結実する考え方が、この小冊子に含まれていることは、タイトルからも推察できよう。この論文を読むことで、ソローキンの農村社会学の萌芽を見届けることができるだろう。

また第5・6号に論文「人口、階級、政党」(Население, класс, партия) が掲載されている。これは後の、『社会移動』の原型になっているともいえる。実際、ソローキン自身も、ミネソタやハーバードでの仕事の祖型となっていると述べている。

ただし都市と農村の関係への着目は、より直接的には、彼自身のロシア革命の経験があったことも忘れてはならない。ロマノソヴァも述べているように、1920年、ソローキン亡命以前の著作『公共社会学教本』(Общедоступный учебник социологии) には、それに関する記述がうかがえるからであ

¹⁹ ソローキンの手になる論文のみを取り上げると、第2/3号に、“То, что часто забывается,” С.14-31; “Сорокин Питирим Александрович,” С.140-158, 第4号に, “Город и деревня: Биосоциол. характеристика,” С.3-23 という論稿が、そして第5/6号には, “Население, класс, партия,” С.86-99という論文が掲載されている。

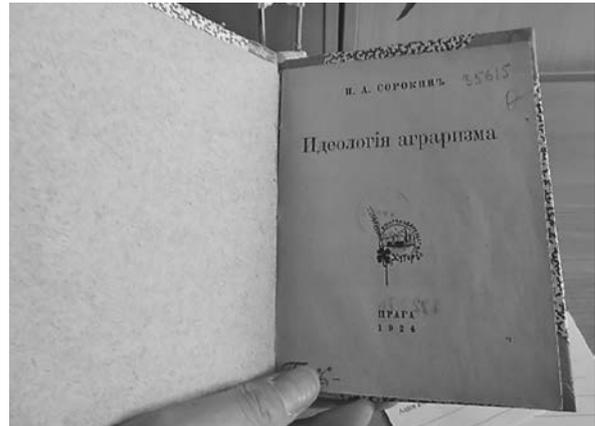
る。すなわち革命後のロシアでは、飢饉による都市から農村への人口の流出が起きたこと、また土地のやせた北部から、豊饒な南の土地への移住があったことなどが述べられている。革命、農村、社会移動という、後年のソローキンのキーワードは、この時点で既に出そろっていることが理解できよう。

以下では、ソローキンのプラハ時代でも、もっとも重要な著作の一冊『農本主義イデオロギー』を紹介することにした。本冊子はプラハでロシア語により刊行された著作であり、たいへん貴重な本である。新書版より少し大きいぐらいのサイズの冊子といたらイメージしやすいだろう。1910年代のロシアでもそうした簡便な出版が出されていた。

ソローキンは、アメリカに渡った後、ギャルピン (Charles Josiah Galpin, 1864-1947) やジンマーマン (Carle Clark Zimmerman, 1877-1983) らと農

村社会学を完成させる。この著作を読み解いていくことで、それ以前の、農村と都市の関係に関するソローキンの考え方をつかむことができるだろう。

図表7 チェコ国立図書館所蔵の『農本主義イデオロギー』の原本



〔要約〕 ソローキン『農本主義イデオロギー』（プラハ、1924年）

都市と農村は互いに敵対してもいれば、依存してもいる。生物学的な違いは下記のとおり。生物学的観点からいうと、農村は健康の貯水槽である。いかに都市住人が健康や衛生に配慮をしていたにしろ、農村住人の健康にはかなわない。都市の工場や閉鎖的な場所での精神的労働は、何世代にもわたり、人間を生物学的に疲弊させる。この仮説は観察によってもわかる。農村は健康な活力に満ちている。逆に都市では不健康と肥満であふれている。むろん一般的原則としていえることだが、さまざまな病気の発症件数においても、農業という職種が一番低いことを、イギリスの統計が示している。都市の健康や心身の回復力は、農村によるものである。農村からの「吸引 (высасывания)」がなければ、それは不可能である。モスクワやペテルブルクに住む人々の出身地をみても、そのことは明らかであろう。

出生率の高さ、幼児死亡率の低さを見ても、農村の方が優れている（フランスおよびロシアの統計を持ち出して説明）。生物学的に都市は人口の消費者であり、生産者ではない。また、健康を損ないこそすれ、維持はしない。論拠となっているのは、アモンである。彼の人口学的「真空」概念や、農村人口は都市の下層から中層、上層へと移動することなどについて説明している。この循環が都市と農村の生態系である。この点で、ロシアのような国の農業文化

は、他の先進工業国と比べてみても、有利である。農村からの人口流入を止めることは、都市の衰退を招くことを意味する。ロシアという社会的生物組織は、他の先進都市と比べて、発展の余地があるということである。さまざまな国の統計をみても、都市よりも農村の方が、生活水準において低いにもかかわらず健康であった。

次に、都市と農村の行為、行動、精神的経験の違いについて。まず都市の特徴としては、機械、鉄鋼、石炭の世界であり、刺激が強い。都市では、新聞、電話、郵便、人間の上下関係、ステレオ、店舗窓口、通りに行き交う人の群れ、騒音、叫び声、広告などであふれている。「時は金なり」といった言葉で象徴される。確かに都市には情報量が多い。しかしそれらは、疑似的体験 (псевдоопыт)、疑似的知識 (псевдознания) である。他方、農村はゆっくりした時間が流れる。せつかちは物笑いの種になる。根気が要る（農耕、種まきなど）、持続的で強靱な精神が求められる。

以上の概要を説明したうえで、ソローキンは、都市の特性を総括している。

都市の特性

1. 病気の割合は農村よりも大きい
2. 自殺や神経症の数は多い
3. 患者の割合は多い
4. 都市生活は緊張を強いる

これらに加えて、精神障害やアルコール依存症などもある。都市そのものが、不安と動揺の温床となっている。それはなぜか、というのが、次の問いである。

都市人口の大部分は労働者である。その生活環境は、閉じた部屋での労働である。機械、鉄鋼、石炭の世界。毎日同じ仕事、単純作業を行う。心に何ももうったえるところがない。人は、そうした環境に満足することはできない。実際のところ、「創造性と発明の本能」、「人生の多様性の本能」、これらは合理主義の対極にあるものである。都市には人々の人生と行動を支配するような、冒険心や好奇心や満足感は見あたらない。石と鉄に囲まれた刑務所が、労働者の世界。困窮、貧困、貧富の格差。要するに、都市化が革命の時代を開き、都市人口の参政権取得と農村の衰退とを招いた。

農村人口はつつましく貧しい暮らしをしても、8時間以上の労働をすることはない。革命の熱狂に踊らされることはない。もし革命の熱狂にまきこまれるときがあるとすれば、それは生存の危機に瀕したときである。

都市と農村は、形式だけではなく内容においても、違いが見られる。

- a) 都市の批判と懐疑の精神、一般的な価値観の崩壊
- b) 農村の方が倫理的、道徳的規範が強い
- c) 環境とりわけ職業的環境の違いが、労働者と農民との間の世界観の差となって現れている。労働者は物質的、機械的、無神論的な世界である。農民は生命とともにある。生まれて死ぬ世界、「魂」、喜び、苦しみ、「痛み」のある世界である。
- d) 都市労働者は農民と財産との関係、経済的集団主義と個人主義との関係において違いが見られる。

農民は主人であり労働者であり、所有者でもある。流通だけではなく生産が大事だということを知っている。また平等と社会化の難しさも知っている。都市では、機械により労働者の平等が達成された。しかし農村は違う。収穫は主人による心配と勤勉と世話に依存している。労働者は利害得失に関心があり、全体社会のことは念頭にない。労働者は現象の複雑さを理解しないので、「平準化 (поравнять)」と「社会化 (социализировать)」が満足と繁栄をもたらしてくれると思っ込んでいる。農民は主人であ

り、所有者であり、個人主義者である。共産主義は農村を壊した。農民階級を労働者ではなく、資本家に近づけた。だが、資本家階級とは違っているところも多い。農民 (крестьянин) ないし農家 (земледелец) は、所有者であるだけでなく労働者でもある。賃金労働者ではないが、搾取もしない。農民階級は他の労働者や資本家の階級と同じではない。

学校、博物館、展覧会、図書館、電信電話、病院、衛生設備、家屋の改善、通り、庭園。こうした都市の繁栄は、農村の犠牲によって支えられている。農民と農村の利益は、政党によって守られてはいない。このような状況がなければ不幸である。健全な農村階級が存在しなければ、都市も国家も成り立たない。「農村の新鮮な力、道徳的純粋さ、平衡感覚 (уравновешенности)、保守主義といったものがなければ、都市や国家は、長期にわたる創造的なエネルギーを発達させることはできず、気力の喪失、革命的な熱狂、暴動、野生の闘争、そして退化へと運命づけられることとなる」。

ロシアの農民が団結するだけでなく、全国の農民の団結が必要である。ロシアは特にそうであるが、どの国であろうと、復活の力と手段は、まず農村にこそ投入されるべきである。農業階級の政治的、経済的、文化的組織が必要である。農民自身の努力なしには、誰も農民を助けてはくれない。もし改善したいという欲求がなければ、農民には貧困と暗闇と停滞とが待ち受けている。

資本家と労働者の独裁 (диктатура) をめぐる戦いが繰り広げられている。都市の労働者と資本家の双方に利益がないばかりか、農民にさえ益するところはない。かえって農民経済に打撃を与え、ひいては国民に対する被害をもたらす。文化は破壊され、野蛮と退化が促進される。近く、第一次大戦の戦禍とは比較にならないほどの戦争が起きるだろう。経済的幸福においても、またスピリチュアル (духовность) な次元でも幸福においても、被害を受ける。農民にしか、「おちついて、もうたくさんだ」といえるものはいない。

資本家に対する労働者階級の訴えかけがそうであるように、農民も世界の農民と団結し、立ち上がらなければならない。「万国の農民、第一にスラヴ農民よ団結せよ！」というスローガンがある。これを最初に実行に移すのは、チェコ農業党が主催する国際農業局である。幸運を祈る。

上の要約文にあるように、農村では、「せっかちは物笑いの種になる」。この一言にソローキンがいたかったことの全てが含まれているように思われる。迅速に、最小の労力で最大の効果を発揮することが、都市の原理である。そうでなければ競争に負けてしまうというのであろう。その原理は農村にはあてはまらない。農村の原理は、それとは正反対と呼べるものであった。時間の観念が労働や仕事に結びつけられるのは、機械の動きである。機械のような「せっかちは物笑いの種になる」。人間は機械ではない。農村では時間の観念は季節や気候などの自然現象に依拠している。そして人間も自然の一部である。それが農村の原理なのである。その農民こそが、創造的イデオロギーを蓄えており、戦意の高揚に抑制をもたらすことができる。

社会学の起源の1つは、確かに都市問題の解決であった。コントの社会学は、フランス革命を経験したあとの人間の生き方を模索するものであった。農村のことは念頭にはおかれていなかった。そのことを敏感に察知したのは、社会学を生み出した先進的な西洋諸国ではなかった。相対的に近代化、あるいは国の成立に後れをとった国々であった。それはアメリカでありロシアであり東ヨーロッパであり、そして日本であった。古くから社会学の中に農村の問題が組み入れられていたのは、これらの国々であったといっていいたいだろう。農村と都市とが別の原理で動いていることを明らかにしようとしたこと、それがアメリカにわたってからのソローキンが最初に手がけた大仕事、農村社会学のめざすところであった。『農本主義イデオロギー』には、そのアイデアが、いたるところにちりばめられていることが分かる。

第7章 亡命知識人に関連する施設

それでは最後に、今回の調査で訪れた亡命ロシア知識人に関連する、残りの施設を簡単に紹介しておきたい。

◆チェコ共和国国立図書館付属スラヴ図書館

(Národní knihovna ČR - Slovanská knihovna)

チェコ国立図書館とおなじ建物内にスラヴ図書館が設けられている。初代館長トゥカレフスキー (Vladimir Nikolaevich Tukalevskii, 1881-1936) の旧

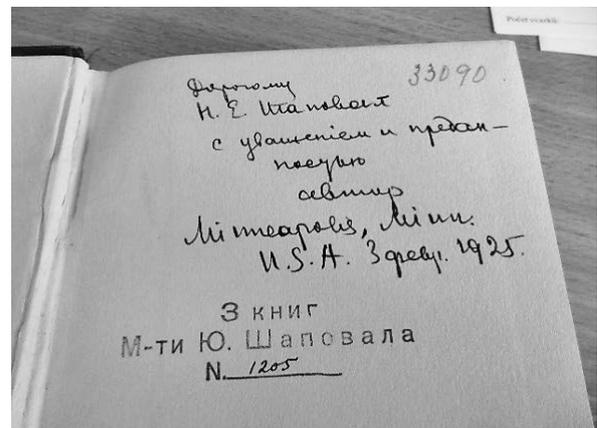
蔵書から始まったというロシア関連の図書館で、亡命ロシア人の思想的なバックグラウンドを知るには、たいへん興味深いコレクションを持っている。

現在約8万点の蔵書がある。

書庫がいくつにも分かれているということで、あらかじめ予約していた著作20冊を、閲覧室で写真撮ったり、コピーを取ったりしつつ、2時間ほどかけて目を通す。

ソローキンがロシア時代に書いた著作はもちろん、アメリカに亡命したあとにソローキンから送られてきた自著謹呈本もある。写真は、そのうちの1冊『革命の社会学』に記されたソローキンの直筆署名である。

図表8 著者謹呈『革命の社会学』の書き込み



親愛なる Н. Е. Шаповал
著者より尊敬と献身の念をこめて
ミネソタ、マサチューセッツ、USA
1925年2月3日

ここで出てくるシャポヴァルなる人物は、ウクライナの文筆家で、社会学についての著作もある。「村と都市」と題する論文もあることは興味深い。それはともかく、ソローキンとの親交も厚かった。シャポヴァルの蔵書が、このスラヴ図書館に収蔵されたということである。すでにロシアのドイコフが、「ソローキンとシャポヴァル」²⁰という論文を書いている。それによると、個人的な手紙のやり取りもあったようである。アメリカに渡る機会をうかがっていたが、ついにその時は訪れなかったとのことが、ドイコフの調査で明らか

²⁰ Дойков, Ю. В., 1999, "Питирим Сорокин и Никита Шаповал," *Социологический журнал*, № 3-4. С. 215-227.

となった。

◆チェコ科学アカデミー・スラヴ研究所

(Slovanský ústav Akademie věd České republiky)

9月19日にスラヴ研究所を訪問する。目的はここにある亡命ロシア人に関する文書の点検である。残念ながら、ソローキンに関する資料は発見できなかったが、その代わりにおもしろい文献を見つけることができた。それは在プラハ・ロシア自由

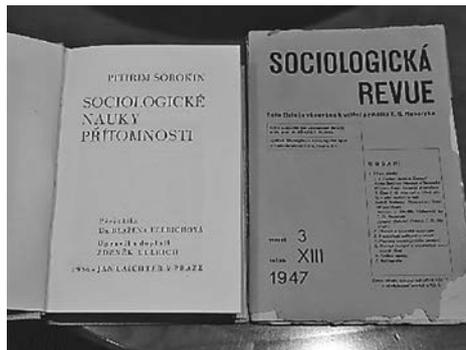
図表9 スラヴ研究所



大学の紀要で、そこにソローキンの友人で同じ時期にプラハに滞在したラプシン (Лапшин, Иван Иванович 1870-1952) の論文があった。それに加えて、ちょうど筆者が訪問していた時期に開催中であった、「亡命ロシア人」に関するパネル展示について紹介してもらい、そちらに向かうことができた。間接的な情報を得ることができるのも、現地調査の醍醐味である。

帰り道に、近くにあった古書肆で、在庫を確認してもらおう。ソローキンやブラハ、あるいはチェコ社会学史に関するものを検索してもらおうと、2件ヒットした。1冊目は、チェコ語訳ソローキン『現代社会学理論』(1936年)で、720頁の大冊であった(写真左)。すでに本稿第5章で触れたズデニェク・ウルリヒによるマックス・ウェーバーの社会学に関する章が付与されているのが特徴である。もう1冊は、1947年に刊行された雑誌『社会学評論』のマサリク特集である(写真右)。

図表10 スラヴ研究所蔵のラプシンの論文(左)と古書店で購入した本(右)



◆亡命ロシア知識人展

亡命ロシア人の展示を見に行く。レトフラーデク・フヴィエズダ (Letohrádek Hvězda) という建物の中で開催されているという。「星の離宮」と

でも訳すべき貴族の別荘である。最寄り駅で道を訪ねたが、よく知らないという答えであった。駅前の地図を頼りに歩いてみると、森のようなものを発見し、その森を抜けると、写真の建物に到着

図表11 レトフラーデク・フヴィエズダと亡命ロシア人の展示



した。かつての貴族が狩猟を行った森、ということで散歩をする人がちらほらといるだけであった。プラハの喧騒からいったん離れて、すがすがしい森の散策となった。

さっそく建物の中に入ってみる。ロシア革命の混乱後、プラハに逃れてきた人々の手による、文学、詩、生物学、絵画、彫刻、映画、舞踊などの展示物が、所狭しとならんでいた。主催者は、国立文学博物館（Památník národního písemnictví）であった。文学や芸術の分野が圧倒的に多いのはそのためであろう。社会科学者や哲学者に関する展示品が少なかったのは残念であった。やはり、チェコ国内でも、社会科学者や哲学者の亡命ロシア知識人にまでは、研究の手が届いていないような印象をうけた。このあたりのことを、今後研究を進めていく上で、掘り下げていかなければならないと痛感した。

まとめにかえて

本稿を締めくくるにあたり、ソローキンにとってチェコとはどのような存在であったのかを記した一文を紹介しておきたい。それは『革命の社会学』の序文である。ソローキンはプラハでの大半の時間を、英語の習得と研究にあてた。その研究の中でも主力を傾けたのは、自らのロシア革命体験を社会学的研究に昇華させた、『革命の社会学』の草稿の完成であった。これはロシア語で書かれたものである。アメリカにわたって最初に出版された著作が、この『革命の社会学』の英語訳だったというわけである。その序文には、次のように明記されている。「本書はチェコスロヴァキア共和国で書かれた。そこで私は、1922年10月のロシアにおいて、ソビエト政府から追放されて以来、もっとも暖かい受け入れ先と友誼を見出した。チェコスロヴァキアの人々と政府のもてなしのおかげで、私はこの仕事を達成することができた」と。この『革命の社会学』の出版をもって、ソローキンのロシアおよび亡命知識人としての生活は終わりを告げる。その後は、華々しいアメリカでの活躍が彼を待ち受けていた。

以上の調査を振り返ってみて、筆者には、1つの想念が頭に浮かんでいる。それは、東欧の社会学にあって、欧米の社会学にないのは何だろうかと考えたばあい、それはスピリチュアル研究だということである。

社会学ではこれまでスピリチュアルな問題に対

し、距離を置いてきた、とされてきた。一例を挙げると、1940年代末に着手されたソローキンの利他主義研究は、長らく社会学の間では無視されてきた。再評価がなされるようになったのは、半世紀を経た2010年代になってからである。社会学においても、ようやくスピリチュアリティに関する真摯な研究が求められるようになったことの1つの表れであろう。

しかし、社会学は本当にスピリチュアリティに対して距離を置いてきたのであろうか。話を西欧社会学に限定するとそういえるかもしれない。しかし、ロシア・東欧圏の社会学の歴史を紐解くと、必ずしもそうとは言えない。1989年以降の社会主義崩壊以降、ロシアおよび東欧では、社会主義以前の学問と思想の見直しがさかんになってきた。「ブルジョア社会学」として切り捨てられてきたものの再評価が深められつつある。その成果から、現代において本当に学ぶべきものを引き出すとするならば、それはスピリチュアリティの社会学ということになるだろう。

ロシアでは、ベフテレフによる動物の共感の実験と発見は、パブロフをして驚愕せしめた。東欧では、プラハ社会学が共感と倫理の研究を深めている。その学問的伝統は、チェコ社会学におけるブルノ学派として位置づけられているものであろう。ソローキンも利他主義研究として、スピリチュアリティの研究を進めた。今回、インタビューに応じてくれたヤナーツク氏が語ってくれた「非言語的コミュニケーション」に関する研究課題も、ある意味では、スピリチュアリティの探求といってもいいものであろう。

近年、ようやくスピリチュアリティに関する学問的関心は、例えば福祉におけるスピリチュアルケア、観光学におけるスピリチュアル・ツーリズムなどとして、ちらほらと見られるようになってきた。欧米の社会学ではあまり見られないスピリチュアリティの探求こそ、ロシア・東欧圏の社会学がもっとも独創性を発揮できる分野である。調査の結果、そのような想念を強く抱いている。

※本研究は科研費 基盤研究 (C)「研究課題：初期ソローキン社会学にみる利他主義 研究の萌芽—ロシア時代の未公開・新資料の分析」(16K04043)の助成を受けたものである。